
騎士の想い

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士の想い

【Nコード】

N6646K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

イーグリッドはエヴァゼリン姫への想いを胸に抱きながら騎士として修業を積んでいた。その中で彼女の危機を前にして。正統派騎士道のお話です。

第一章

騎士の想い

彼の心にあるのは何か。一つしかなかった。

騎士である、ならばそこにあるものは一つだけであった。

「私は貴方に全てを捧げます」

騎士になったその日に相手に告げた。

「それを今誓いましょう」

「その言葉偽りではありませんね」

「私は騎士になりました」

だからだというのである。

「それが証にはならないでしょうか」

「わかりました」

相手も彼の言葉を受けて微笑んだ。これが騎士イークリッドと姫エヴァゼリンのはじまりだった。イークリッドは騎士になったその日に誓ったのである。

イークリッドは赤い髪に青い目をした美男子であった。端正な顔立ちに長手で長い手を持った見事な身体を持っていた。武術だけでなく学問や芸術にも秀でている男だった。

そしてエヴァゼリンもまた。豊かな金髪に湖の色をした瞳の美しい姫であった。幼さが残るがその儂げな美貌が帝国に知られるようになっていたのである。

イークリッドは彼女の騎士として忠誠を捧げると誓った。その彼を皇帝はこう評した。

「獅子になれる」

「獅子にですか」

「そうだ、なれる」

こう彼を評したのだった。そうしてだった。

彼は騎士になってから多くの戦いを経ている。それは戦場での戦

いだけではなかった。騎士としての戦いも多く経てきていたのである。

「エヴァゼリン姫？あの」

ある貴婦人はある日エヴァゼリンに対してこう言った。

「所詮は貧しい侯爵家の三女ではありませんか」

「それがどうかされたのですか？」

「その程度だということですよ」

眉を顰めさせるイークリッドに対しての言葉であった。

「如何に姫と言われていてもです」

「姫をそうけなされるのか」

イークリッドはその彼女に対してつつかりだした。

「何故その様なことを」

「事実を言っただけですよ」

貴婦人は平然としたまま彼に返した。

「それにまだ」

「まだ？」

「若いですわね」

二人は宴の場で言い合っていた。宴であるがそれでも二人は酒を飲むのも御馳走を食べるのも止めてそのうえで言い合っているのである。

「それでまだ。どうだというのですか」

「姫を侮辱することは許しません」

彼は自分のことよりも怒るのだった。

「決めています」

「決めてだと仰るのですか？」

「そうです、その通りですよ」

言いながらさらに怒らせる。そうしてであった。

「姫をこれ以上侮辱されるのならば」

「どうされるといいますか？」

「姫の名誉を守らせて頂きます」

そうするというのである。

「何があるうとも」

「何があるうともと仰いましたね」

「はい、それが何か」

「わかりましたわ」

貴婦人は彼に対して悠然と言葉を返してみせた。

「それではです」

「どうされるおつもりですか？それでは」

「お話はこれまで」

貴婦人の言葉がびしゃりとしたものになった。宴のその場は完全に二人のものだった。周りは二人を囲んでそのうえで遠巻きに見ている。

「それではです」

「はい、それでは」

「貴方がエヴァゼリン姫の名誉を守られるといいでしょう」

そうせよというのである。

「何なら私が相手を致しましょうか」

「御婦人を相手にせよと」

「何も剣や槍だけではありませんまい」

貴婦人のペースだった。しかしイークリッドはそれでも引いてはいなかった。毅然として貴婦人に対して向かい合っているのだった。

「そうではないですか？」

「剣や槍だけではないと」

「音楽です」

それだというのである。

「音楽で名誉を守ることでもできますよう」

「音楽を」

「そう、音楽です」

また言う貴婦人であった。

第二章

「それで如何ですか？貴方が音楽で戦われるというのは」

「わかりました」

元より下がるつもりはなかった。やはり毅然として返すイークリッドだった。

「それではお受けしましょう」

「私は豎琴を使います」

貴婦人は悠然としたまま述べてみせた。

「貴方はどうされますか？」

「豎琴です」

彼もそれだというのであった。

「同じものでお受け致しますよう」

「それで貴方の姫の名誉を守られるというのですね」

「そうです」

まさにその通りだというのだった。

「その通りです。それでは」

「早速勝負を」

貴婦人は自信に満ちた声で勝負をはじめるとした。こうして宴は中断され豎琴の勝負に入った。すぐにイークリッドのところに豎琴が持って来られる。

しかしであった。ここで。エヴァゼリンがその彼に気遣う顔で声をかけてきた。

「あの」

「何でしょうか」

「何もそこまで」

その顔で彼に対して言うのだった。

「されなくとも」

「これは当然のことです」

しかしイークリッドは微笑んで彼女に言葉を返した。

「これはです」

「当然だと仰るのですか」

「そうです」

まさにその通りだという。

「何故なら私は姫の騎士だからです」

「だからだというのですね？」

「ですから姫の為に豎琴を取ります」

それが理由だというのだ。

「それだけです」

「ですが貴方は豎琴は」

エヴァゼリンはその彼に対してさらに言う。それは問いになっていた。

「お使いには」

「それはですが」

「笛だった筈です」

彼の得意とするものはそれであった。笛の使い手なのだ。

それに対して豎琴は拙い。それで彼女は心配しているのだ。

「それでは貴方にとって」

「相手の望むもので受けて立つ」

しかしここでも微笑んで言葉を返す彼だった。

「それが騎士です」

「騎士ですか」

「そしてその勝負には必ず勝つ」

彼はこうも言った。

「私は姫の名譽を守る為に勝ってみせます。御覧になって下さい」

「それでは」

「お任せ下さい」

確かな言葉を出しながら今豎琴を手に取った。

「姫の名誉は必ず守ってみせます」

こう告げて勝負に向かうのだった。宴が開かれていた場所に戻るともつ貴婦人がいて豎琴を手にしていた。彼女は回りに宴に来ている者達を遠巻きにしながらそのうえで彼に対して声をかけてきた。

「下がられなかつたのですね」

「何度も言いますが私は騎士です」

その豎琴を手にして応えるイークリッドだった。

「だからこそです」

「騎士だからですか」

「私は姫の騎士です」

こう貴婦人にまた言った。

「それ以外の何者でもありません」

「ではエヴァゼリン姫の騎士よ」

「はい」

「見せてもらいましょう」

こう彼に言うのであった。

「その御心を」

「それでは」

二人は豎琴の勝負に入った。すると。

イークリッドの豎琴は確かにたどたどしい。それに対して貴婦人のそれは優雅で見事なものだ。その差は聴いただけですぐにわかるものだった。

第三章

しかしであった。彼は果敢に奏でていた。そしてそこには心があった。誰もがその心を確かに感じ取ることができたのである。

「これは」

「そうですね」

「豎琴の腕自体がたどどしいが」

それでもなのだった。

「心を感じます」

「確かに」

「見事なまでに」

それを感じ取って誰もが言い合っただった。

「こっした豎琴もまた」

「いいものですね」

「まことに」

貴婦人のそれには聴き惚れるものがあつた。それに対してイークリッドのそれは心に訴えるものがあつた。確かに拙い技術だが皆それを聴くのだつた。

そして終わってから。聴いていた者達は静かに拍手をした。そのうえで彼に対して優しい微笑を向けて言うのであつた。

「貴方の御心は伝わりました」

「勝負とは関係がなく」

「私は勝つたのではないのですか？」

イークリッドは彼等の言葉を聴いてまず言った。

「それでは姫の名誉は」

「いえ、そうではありません」

「それは守られました」

彼等はこちら告げるのであつた。

「それは確かです」

「御安心下さい」

「そうですか」

それを聞いてまずは安心した顔になるのであった。

「それではいいのですが」

「その通りです」

ここで貴婦人も彼に対して言ってきた。

「イークリッド殿」

「はい」

「お見事でした」

これまでの意地の悪そうな笑みは消えていた。そのかわりに毅然とした、正しい意味で貴婦人に相応しい顔で彼の前にいたのであった。

「貴方の御心を聴かせてもらいました」

「左様でした」

「そして」

彼女はさらに彼に対して言ってきた。

「貴方の方が忠誠を捧げるエヴァゼリン様のこと」

「わかって頂けましたか」

「はい、わかりました」

そのことも確かに応えた。

「よく」

「それは何よりです」

「真の騎士はおのずと己が忠誠を捧げるに相応しい相手の下に来るものです」

「おのずとですか」

「それが神の御導きです」

まさにそれだというのである。

「だからこそ」

「では姫は」

「今申し上げた通りです」

ここで微笑みになった。しかしその微笑みは静かで優雅なものであった。その微笑みもまた貴婦人に相応しいものであったのである。

「これでおわかりですね」

「はい、それでは」

「その忠誠を最後まで貫かれることを祈ります」

今度は彼への言葉であった。

「この度はいいものを見せて聴かせて頂きました」

彼はエヴァゼリンの名誉を守っただけでなく己の名声もあげた。

しかし彼にとって自分の名声はどうでもいいことであった。それよりも忠誠を捧げるその姫の名誉が守られたことを何よりも素晴らしきこととしてそれを喜んでいるのであった。ただそれだけであった。

そしてある日のことだ。エヴァゼリンの領地が敵に襲われた。隣国が彼女の領地に兵を進めてきたのである。

「何っ、それはまことか!？」

「はい、そうです」

イークリッドに対して家臣の一人が狼狽する声で報告してきた。

今彼は自分の領地にいた。そこで丁度政治を見ていたのである。

第四章

「侯爵領にあの国の兵がです」

「攻め込んだできたというのか」

「如何致しましょう」

「それはもう決まっている」

すぐに家臣の問いに答えたのだった。

「姫もおられるな」

「はい」

「そういうことだ。私は行く」

一言であった。

「すぐにだ。そして姫を御護りする」

「そうされるのですね」

「ましてや帝国に敵が攻め込むなぞということとはだ」

「許せませんね」

「どちらにしても私は行く」

そうするといふのである。

「わかったな。そういうことだ」

「はい、それでは」

「出陣の用意だ」

言いながらすぐに傍に置いてあった己の剣を手を取った。そうして。

人を呼んだ。今度叫んだ言葉は。

「鎧だ！そして馬の用意を」

「はい！」

「では！」

「陛下にもお伝えせよ、周辺の諸侯にもだ！」

彼の指示は矢次早あった。わかっている者の動きだった。

「よいな、ではすぐに出陣だ」

「すぐに侯爵領にですな」

「その通りだ。救援に向かう」

それ以外は考えていなかった。まさにその為に今鎧を着けさせていた。

その鎖帷子を着させられるとだった。腰に剣を備え付けてまた叫んだ。

「行くぞ！」

「はい、では！」

「いざ！」

周りの者達もそれに応える。こうして彼は手勢を引き連れて出陣した。

侯爵領に入っても暫くは平穏な場所が続いた。彼は迅速に兵を進めながら傍にいる自分の家臣達に対して問うのであった。

「この辺りにはまだ来ていないのだな」

「攻め込んで来たばかりですので」

「ですからここにはまだ」

こう答える家臣達だった。今彼等は田園の近くを通っている。田園の中には農夫達がいて畑仕事を営んでいる。その光景は攻め込まれている国のそれとは思えなかった。

「敵は侯爵の居城を包囲しているそうです」

「そしてそこには」

「姫もおられる」

そこから先はもう言うまでもないことであった。

「そうだな」

「はい、そうです」

「その通りです」

こう返事が返ってきたのであった。

「ですから一刻も早くです」

「侯爵の居城に向かいましよ」

「その通りだ。では侯爵の居城にだ」

そこに兵を進ませるのであった。彼は兵を出来る限り速く進ませた。その侯爵の居城はだ。

立派な城であった。城壁は高く堅固である。街と一つになっておりその広さも中々のものだ。だがその広い街が今完全に取り囲まれていた。

白の周りには敵兵達がいる。そうしてそれぞれ弓矢や投石器を使って攻撃を仕掛けてきていた。

「攻めろ！」

「攻め落とせ！」

彼等の喧騒の音が聞こえる。それに対して城壁の兵士達はそれぞれ弓矢を放ち槍を手にして梯子から登ってくる敵兵を退けていた。激しい戦いが続いていた。

主である侯爵も陣頭指揮を執っていた。彼も鎖帷子を着て剣を手にしている。そのうえで周りの騎士や兵達に対して言うのであった。

「怯むな！」

まず言った言葉はこれであった。

「援軍は必ず来る。それまで持ち堪えるのだ」

「来るのですね」

「そうだ、だからだ」

何としても持ち堪えろというのだった。彼も必死だった。

その頃エヴァゼリンは城の奥にいた。周りの侍女達はおろおろとしている。

「このままではここまで敵が」

「そうですわ。ここにまで」

「安心するのです」

エヴァゼリンはその侍女達に対して穏やかだがしっかりとした声で告げた。

第五章

「そうはなりません」

「ならないというのすか？」

「ですが敵はここまで」

「あの方が来られます」

だからだというのである。

「あの方が来られるからです。安心するのです」

「あの方といますと」

「イークレッド様」

「あの方がですか」

「そうです」

その彼が来るというのである。

「ですから。落ち着くのです」

「しかし。来られるでしょうか」

「敵はあまりにも多いです」

「あの方の御領地では」

侍女達はこう言ってまだ不安を見せていた。それは安易には消えなかった。

「それ程多くの兵は」

「ですから」

「それでも来られます」

そう言われてもだった。エヴァゼリンは動じなかった。そしてさらに言うのであった。

「あの方だけはです」

「来られると」

「そうなのです」

「はい、そうです」

また言うのであった。

「必ず来られます」

「では。お嬢様の御言葉を」

「私達も信じさせて頂いて」

「あの方が決して嘘を仰らないように」

「また侍女達に対して告げたのだった。」

「私も決して嘘はつきません。信じて下さい」

「では」

「その様に」

侍女達もこれで落ち着きを取り戻した。その時だった。

部屋の中に別の侍女が飛び込んできた。そうしてエヴァゼリンに
対して叫ぶのであった。

「お嬢様、大変です！」

「どうしました？」

「援軍が来られました」

「ここの彼女に告げてきた。」

「援軍が。敵の横から来ました」

「そうですね。来られたのですね」

「はい」

まさしくその通りだというのである。

「来られました、そして先頭には」

「あの方が」

「おわかりなのですか」

「必ず来られるとわかっていました」

「彼女は微笑んで言った。」

「必ずです」

「そうだったのですか」

「あの方は騎士です」

「彼女はまた言った。」

「ですから何があるうとも」

来ると。そう信じていたのである。そしてその通りになった。

イークレッドは己の軍を城を包囲しているその敵軍に対して突っ込ませた。自身はその先頭に立ち激しく剣を振って敵を倒していく。

「さあ、私と戦う者は誰だ！」

馬上で敵に叫ぶ。

「誰でもいい、天界に行きたい者は出て来るのだ！」

「くっ、まさか援軍が来るとは！」

「しかもだ、強いぞ！」

「あの先頭の騎士、何者だ！」

敵兵達は戦場を駆け巡る彼を見て叫んだ。

「一体あれは」

「何者なのだ」

「イークレッド卿だ」

ここで騎士の一人が言った。

第六章

「帝国でも有名な騎士の一人だ」

「あの若者がか」

「手強いぞ」

また一人の騎士が真剣な面持ちで言った。

「あの男は」

「ではどうする？」

「ここは」

「撤退だ」

指揮官を務めるこの国の大貴族が言った。

「このままでは総崩れになってしまう。城内に籠城している兵士達も出て来た」

「確かに」

「このままでは」

「撤退する」

また言う指揮官だった。

「いいな、これでだ」

「はい、それでは」

「無念ですが」

こう言い合って撤退する彼等だった。だがイークレッドの軍と城内から出て来た軍の攻撃を受けてかなりの損害を出した。この時にもだった。

イークレッドは追撃を命じながらこう叫んでいた。

「攻城兵器を潰せ！」

「それをですか」

「そうだ、潰せ！」

この指示を出すことを忘れなかった。

「まずはそれを潰す、いいな」

「それは何故ですか？」

「敵兵だけではなくですか」

「攻城兵器を潰しておけば後の籠城戦が楽になる」
「だからだというのである。」

「わかったな、そういうことだ」

「左様ですか。それでは」

「その様に」

「そうだ。まずはそういういったものを潰しておく」

「こう言つてであつた。実際に攻城兵器を攻撃し潰していく。こうして敵軍にかなりの損害を与えたのであつた。」

そのうえで城に入ると籠城していた将兵や市民達から歓喜の声で迎えられた。しかし彼はそれには喜ばなかつた。こう言っただけだつた。

「当然のことをしたままでです」

「当然のことをというのか」

「そうです」

侯爵に対して謙虚に述べた言葉だつた。

「これは当然のことです」

「救援に來られたことが当然だといつのですか」

「私は帝国の騎士です」

まずはこのことを侯爵と周りにいる將兵達に告げた。今彼は城内の領主の間で侯爵と対していた。

「その帝国の諸侯や民衆が危機ならばです」

「駆けつけると」

「そうです」

まさにそうだと言つのであつた。

「それだけです。そして」

「そして？」

「私はエヴァゼリン姫の騎士です」

やはりこのことも言つのであつた。

「だからこそ。ここに参上しました」

「左様ですか」

「この命をかけて」

彼の言葉も表情も強いものになった。

「姫を御護り致します」

「左様ですか。それではです」

「はい」

「期待させて頂きます」

侯爵もまた強い言葉と表情で応えた。

「貴方のその御力を」

「有り難うございます。それでは」

こうしたやり取りのうえであった。彼も籠城戦に参加することになった。その指揮は的確でありかつ勇敢であった。彼の参加により籠城側は一気に優勢になった。

まず敵の攻城兵器を破壊したのが大きかった。それにより敵軍の攻撃力はかなり低下していた。その攻撃は目に見えて弱まってしまうていた。

第七章

そして彼は時折城から出て急襲を仕掛けた。これもかなりの効果があった。

「敵は弱まってきたいます」

「このまま勝てます」

「いえ」

イークレッドは周りの楽観論に対して首を横に振ってこう述べるのだった。

「油断大敵です」

「ではまだですか」

「何かがあると」

「まず。城の中です」

このことを述べた。

「食料はまだ大丈夫ですが」

「はい、それは」

「あと三ヶ月はいけます」

「三ヶ月しかありません」

あえて悲観論を言う彼だった。

「三ヶ月敵が攻め続ければそれで終わりです」

「ではそれまでに勝負をつけると」

「そうなのですね」

「その通りです」

まさにそうだというのである。

「そしてです」

「そして？」

「まだあるのですか」

「今の敵軍はかなり弱まっています」

次に言及したのは敵軍についてであった。今も彼等がいる城壁の

下から攻撃を続けている。彼等にしても必死なのが見て取れる。

「しかしです」

「しかしなのですか」

「といたしますと」

「援軍が来る可能性があります」

鋭い目でその危惧を口にするのであった。

「それもです」

「敵の援軍」

「それもあると」

「ないとは言いません」

こう言うのであった。

「それは決してです」

「というに既に敵軍はです」

「援軍を要請していて今こちらに向かっていると」

「そうなっていれば危険です」

まさにそうだというのだった。

「こちらも陛下及び諸侯に援軍を要請していますが」

「といたしますと」

「イークレッド卿はそこまで」

「はい、させて頂きました」

まさにその通りだというのである。

「既にです」

「左様でしたか」

「既にそこまで」

「確か侯爵もそうされていました」

このことは既に侯爵自身から聞いていた。そして予想していたことでもあった。援軍もなしに籠城するというのは愚か者のすることだからである。

「ですからこれはです」

「持ち堪えるべきだと」

「今は」

「そうです。もっとも援軍が来るのは遅くて三週間後です」

その期日はもう分析しているのだった。

「食料の心配はありませんが」

「問題は援軍ですな」

「敵方の」

「はい、そうです」

その彼等だというのだ。イークレッドは応えながら目の前に迫る敵兵を右手に持っている剣で刺した。そのうえで彼が登ってきたその梯子をひっくり返しそれでそこから来ようとしていた他の兵士達も落としたのだった。悲鳴が高い城壁の下から聞こえてくる。

「その通りです」

「彼等が来れば」

「その時は」

「危ないです」

そう言うのであった。

第八章

「ただです。その時は」

「その時は？」

「どうされるといいますか？」

「伏兵を使います」

彼がここで言った策はこれであった。言いながら城の周りを見ている。そこは見渡す限りの平原だがとどこころに森も存在している。

「見たところこの辺りには森が多いですね」

「はい」

「では森を使われるのですね」

「そうです」

この辺りは以心伝心であった。多く語る必要もなかった。

「その森に潜んで、です」

「そうされるのですか」

「その時は」

「その時のことも考えています」

イークレッドはまた冷静に述べた。

「敵が来たその時に仕掛けます」

「援軍が来てからですか」

「その時に」

「はい、そうします」

強い言葉で応える。戦いながら。弓矢は届かないが敵兵は時折来る。その彼等を片っ端から斬っていくイークレッドであった。

「それもお任せ下さい」

「わかりました。それでは」

「その時はまた」

こうした話があった十日後である。敵の援軍が来た。イークレッド

ドの危惧があたつた形になつた。

援軍はかなりの数だつた。万に達していた。その援軍を受けたこととでそれまで戦っていた敵軍は一気に歓声をあげたのであつた。

「我々と同じだな」

それを城壁から見た侯爵はぽつりと言つた。

「援軍の存在は実に有り難い」

「攻城兵器も多い」

「かなり持つて来たな」

見れば様々な種類のものが見えた。それが何に使われるかは言つまでもなかつた。

「ではあれでか」

「一気にか」

「そうなるでしょう」

イークレッドも城壁にいた。そこで言つのであつた。

「しかしです」

「しかし？」

「何か」

「彼等は今日は攻めては来ません」

「こつ言つのである。」

「今日はです。何故なら」

「それは何故だ？」

「今彼等は戦場に到着したばかりです」

その歓声をあげる敵の援軍を見据えながらの言葉である。

「今丁度です。移動の疲れがあります」

「では今日休んでからか」

「はい、攻めるのは明日になります」

「そつだといつのである。」

「夜襲もないでしょう」

「今夜は休み疲れを癒すか」

「そつします。そして」

ここでイークレッドの言葉も顔も鋭く強いものになった。

「次の日の朝からです」

「攻撃に出て来る」

「敵が」

「はい、そうです」

そうなるというのである。

「だからこそここはです」

「夜のうちに兵を出し」

「そのうえで伏兵をと」

「私が行きます」

イークレッドは自ら名乗り出た。

「その伏兵にはです」

「しかしそれはです」

「あまりにも危険なのでは？」

「確かに」

彼の今の提案については周りの者が一斉に怪訝な声をあげた。

第九章

「幾ら何でも」

「城に出られると」

「このまま城に留まっても同じです」

しかし彼はその彼等の言葉に微笑んで返すのだった。

「ですから。ここはです」

「行かれるのですね」

「それでは」

「そうです。行きます」

また言う彼だった。こうして話は決まった。

イークレッドは夜に城を出る。その時であった。

己の軍と共に城を出る彼にだ。エヴァゼリンが来たのであった。

彼を気遣う顔で見えてであった。言うのである。

「御気をつけて」

「御心配なく」

その彼女の馬上から微笑んで返す彼だった。既に武装しておりその後ろには軍がある。見れば誰もが毅然とした顔をしていた。まさに戦場に向かう顔をしている。

「それでは今から」

「御武運を祈ります」

こうその彼に告げた。

「どうか生きて」

「私は必ず生きて帰ります」

イークレッドは微笑んで彼女の言葉に返した。

「では明日また」

「はい、勝って帰って下さい」

こう言っただけであった。戦いに赴く彼だった。その夜に森に潜み朝を迎えた。

朝になるとだった。敵軍が城を囲んだうえで総攻撃を仕掛けてきた。それはこれまでの戦いとは比較にならないまで激しいものだった。

「くっ、この数だと」

「もたないぞ」

「攻城兵器もある」

それも目に入っていた。しかも目に入るその数はかなりの数だ。それが一斉に攻撃を浴びせてくる。威力もかなりのものだった。

「このままでは」

「まずいぞ」

「やはりそれを考えれば」

ここで、であった。彼等は森を見た。

そこにこそ彼等の希望があった。そのイークレッドがである。

敵の攻撃がいよいよ本格的なものになる。そしてそれが今まさに城に完全に向かおうとしていた。その時である。森から歓声が起こった。

「よし、敵の本陣を目指す！」

「はい、それでは！」

「このまま！」

こうして彼が率いる軍は一気に敵の本陣を衝いた。それは後ろから攻め敵陣を一気に突き崩した。数は僅かだったが精強であり完全に不意を衝かれたこともあり敵軍は総崩れになった。戦いは帝国の援軍を待つまでもなく戦いはこれで決まったのである。

イークレッドは負傷したがそれでもだった。この武勲は見事であった。

それは当然皇帝の耳にも入り。彼はあることを考えたのだった。

「イークレッド＝フォン＝ローゼンマイヤーを」

「どうされるのですか？」

「彼を」

「その武勇は見事だ」

まずはそれを褒め称えるのだった。

「怪我は大丈夫だな」

「はい、回復に向かっています」

「命に別状はありません」

「そうか。ならばよし」

怪我のことを聞きさらに頷く彼等だった。

「それではだ」

「それでは？」

「彼をどうされるのですか？」

「東方の辺境伯に命じる」

そうするというのである。

「よいな、辺境伯にだ」

「何と、辺境伯にですか」

「それはまことですか？」

「皇帝の名にかけての言葉だ」

毅然として返す皇帝であった。まずはこの言なのであった。

第十章

「それをまず言うておく」

「ではまことに」

「皇帝に」

「左様」

まことだというのである。そうしてであった。

「そしてだ」

「そして？」

「まだあるのですか」

「あの者はまだ独身だった筈」

皇帝が次に言及したのはこのことだった。

「それならばだ」

「婚礼をですか」

「では」

「ロツクベルク侯爵家のだ」

エヴァゼリンの家である。

「エヴァゼリン姫を嫁にだ」

「何と、そこまですか」

「あの姫を」

「そうだ。丁度いいではないか」

まさにその通りだというのである。

「そうだな」

「まさかそこまでされるとは」

「彼に」

「それだけの武勲を見せてもらった」

まずはそれを褒める皇帝だった。

「そして心もだ」

「彼の心をです」

「それを」

「左様、帝国への忠誠心と騎士道精神をだ
その二つをだというのである。」

「そのエヴァゼリン姫へのな」

「それをなのですね」

「まさにそれを」

「そうだ。だからこそ与える」

まさにそれをというのである。

「わかったな。それではだ」

「はい、それではすぐに」

「彼にそう伝えます」

「その心に見合ったものが与えられる」

皇帝は厳かにこの言葉を出した。

「それが世の中というものだ」

こうしてイークレッドは辺境伯になると共にエヴァゼリンを妻に迎えることとなった。一介の騎士からである。それはまさに彼にとって至高の幸福であった。

婚礼の場だ。彼はその顔を真っ赤にさせていた。まるでこの世にいるのではないといったように笑顔でいたのであった。

「あの」

「もつ少しですな」

そんな彼を見た周りの者も流石に声をかけた。

「幾ら辺境伯になられたからといって」

「それは流石にないのでは」

「それも確かに有り難いことだ」

イークレッドは既に礼装に身を包んでいる。その姿でこの世にあるとは思えない顔になってである。そうして彼等に対して言葉を返すのであった。

「だが。それ以上にだ」

「御婚礼ですか」

「それで」

「これで私は一生騎士でいられる」

こう言うのである。

「このことが何よりも嬉しいのだ」

「エヴァゼリン様の騎士として」

「だからなのです」

「そうだ。私はかつて誓った」

微笑みを浮かべての言葉である。

「あの方に生涯を捧げると」

「では今もまた」

「そうされるのです」

「これからもだ。そして騎士として」

こんなことも言うのだった。

「帝国にも命を捧げるのだ」

「では今边境伯としてもです」

「婚礼の場に」

「赴かせてもらう。あの方の傍らで」

こう言って今エヴァゼリンの下へ行くのだった。彼は騎士だった。その心を強く抱いてそのうえで。今婚礼の場に入るのであった。これが後にエヴァゼリンの夫として、また帝国の边境伯として名を知られることになる彼の若き日の、今も語り継がれている話である。

騎士の想い

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6646k/>

騎士の想い

2010年10月8日14時22分発行